

2021年

5月第3・4・5週の礼拝説教要約

・ 5月16日：使徒言行録1：6-11

「永遠なるイエス」

・ 5月23日：使徒言行録2：1-13

「天からの約束」

・ 5月30日：使徒言行録2：36-42

「神からの賜物」

衣笠病院教会 牧師 宮原晃一郎

『永遠なるイエス、天からの約束、神からの賜物』

使徒言行録には復活のイエスが40日間、弟子達の前に現われていたことが記されています。その後、オリーブ山か、その近辺の何処かから、イエスは天へと帰られるのですが、その地上での最後のイエスと弟子たちとの会話はこういうものでした。

使徒たちは集まっていた時、「主よ、イスラエルのために国を建て直してくださるのは、この時ですか」と尋ねた。イエスは言われた。「父がご自分の權威をもってお定めになった時や時期は、あなたがたの知るところではない。ただ、あなたがたの上に聖霊が降ると、あなたがたは力を受ける。そして、エルサレム、ユダヤとサマリアの全土、さらに地の果てまで、私の証人となる。」

弟子たちが尋ねた内容と、イエスの答えとの間には大きな隔たりがあります。地上に残された彼らの頭でその真意を悟ることは、到底、不可能でした。彼らは復活のイエスに対しても、飽く迄、ユダヤの王となること、独立国家を再建してくれることを期待していたのです。

一方、イエスが十字架に架かる前にピラトはイエスに対してこう尋ねました。「お前はユダヤの王なのか?」。このように、弟子たちの期待とピラトの嫌疑は、図らずも「ユダヤの王としてのイエス」という点で一致していたのです。また、この期待と嫌疑が、イエスの死刑判決に、大きな影響をおよぼしました。しかし、それに気が付かない弟子たちは復活のイエスに対しても、愚直にも、全く同じ期待を寄せていたのです。

40日間、地上に留まったイエスの最後のメッセージは聖霊降臨の約束でした。

イエスは弟子たちの目の前で天に昇られました。さて、その10日後のユダヤの五旬祭の日、これを祝う大勢の人々でエルサレムは大変な賑わい

です。そこにはユダヤ人ばかりか、様々な民族の姿がありました。

すると、突然、大きな音とともに、空からのダウンバーストが街に降下します。さらに、この風と共に炎のような舌のような形をしたものがイエスの弟子たちの居場所に降り注ぎました。人々は、この不思議な光景を自分の目で確かめるために弟子たちの所に急行します。そこにはユダヤ人ばかりか様々な国の人々が集合します。当時の彼らの共通語は、ギリシャ語でしたが、なぜか人々は、それぞれの故郷の言葉を耳にします。イエスの弟子たちが、まさにそれぞれの言葉で神を賛美していたのです。

そこにいた弟子たちを代表して、リーダーのペトロが、今、起きていることこそ預言者ヨエルが予言したことの実現であると説明します。「終わりの時に…神の霊が注がれた者が預言をする。」その聖霊降臨の時が来ている、と。

この時、初めて、弟子たちは、自分たちの期待が間違っていたことにも気が付いたようです。「イエスはダヴィデの子でもなければユダヤの王でもない。」ということに。イエスの受難週の始まりに、エルサレムスに入場する際の群衆の叫びと軌を一にしていた弟子たちの期待が、そもそも間違いであったということに。「ダヴィデが主と仰いでいた神こそイエス・キリストであるから、この方がダヴィデの子（子孫）であるはずはない」と。彼らは、この時をもってやっと、イエス・キリストが支配するユダヤ民族の独立国家の実現という幻を捨て去ることができたのです。

さて、弟子たちの前には様々な国の出身者がいたことが聖書に記されていますが、その中には少なからずのユダヤ人も含まれておりました。彼らに向かってペトロは言いました。「あなたがたが十字架につけたこのイエスを、神は主とし、またメシアとなさったのです。」

十字架につけよ、と、叫んだユダヤ人たちも、たしかにこの場にいたようです。彼らはペトロの言葉に「大いに心を打たれた」とありますが、原語のギリシャ語では「心を刺し貫かれた」と書かれています。わかりやすく言えば敵対的であった者、身に覚えのある者らがこの場でペトロから反撃を受けており、心にグサッと来た、という意味になります。その時の反論が

こう記されています。「わたしたちは、どうしたらよいのですか?」。ここも原意に忠実に訳すならば「(取返しがつかないことをしてかした) 自分たちに、いったいどうしろと言うんだよ?!」という意味です。売り言葉に買い言葉です。この期に及んで未だ反省は見られません。

コロナウイルスの対応に失敗し、多くの犠牲者を出してしまった政府や一部の自治体の責任が問われる時に、いったいどんなやりとりが議会でなされるのか、命の問題はけっして蔑ろにはできないのです。

神キリストを死に追いやった者らに対して、ペトロは尚も神の救いの可能性を示して、こう叫びます、「悔い改めよ！」。

そうです、キリストの十字架を誘発し彼を死に至らしめた第一級の罪人たちでさえも、まだ、神の赦しと救いの対象であり続けていることが、ここに示されるのです。そんな彼らは、生まれる前から救いにあずかる運命にあったのでしょうか。もし、そうであるならば、なぜ、彼らはキリストを刺し殺せ、などと叫んだのでしょうか?!

何が何でも救われたい人間にとっては、人の罪などは二の次なのでしょうか、あるいは、人類が救いにあずかるための救命ボートには、限られた定員が定められており、その乗船者名簿には生まれる前から定員の該当者名が記されていたのでしょうか。

ペトロは彼らに向かってこう言い切るのです。「(救いの) 約束はあなたがたのもの」であると。同時にこれは、「主が招いてくださる者になら、誰にでも与えられているもの(=約束)」であると。つまり、ユダヤ民族には限定されないのだと。さらに、こう付け加えます、「邪悪なこの時代から救われなさい」と。つまり、世が世なら、起こり得なかった混乱に誰もが巻き込まれてしまったことについて、責めることはしない、と。

イエスはあるときこう言いました、「あなたがたの中で罪を犯したことはない者が、まず、この女に石を投げなさい。」すると、女を罪に定めようとした者たちは、一人のこらずその場を立ち去りました。

イエスの弟子たちは師の教えを柔軟に受け継ぎ、なおも罪人らを神の救いへと導き入れていたのです。